

○トマトの害虫

1 コナジラミ類

(1) 福島県での発生状況

本県のトマト及びミニトマトでは、オンシツコナジラミとタバココナジラミの寄生が確認されている。近年は、タバココナジラミによって媒介される、トマト黄化葉巻病(TYLCV)の発生が問題となっている。

夏秋雨よけ栽培では、5月頃から発生が確認され、栽培期間を通して発生する(図1)。

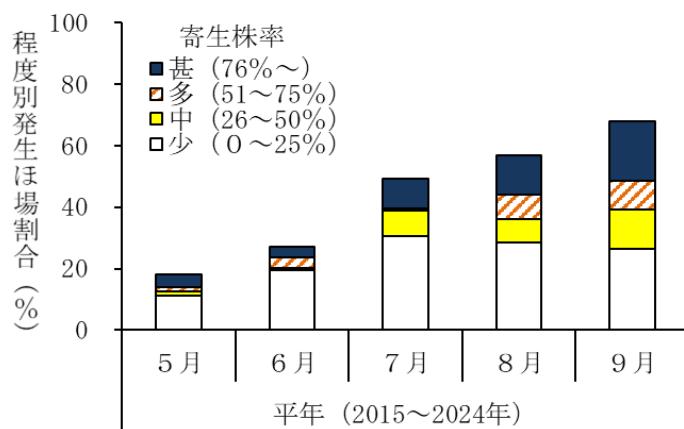


図1 コナジラミ類の発生状況

(夏秋トマト県内11ほ場:県中2、県南4、会津5)

(2) 形態及び生態、被害の様子

形態及び生態については、病害虫ライブラリー-野菜花き類の病害虫(コナジラミ類 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf>)をご参考ください。

トマト及びミニトマトでは、排泄物によるすす病が発生し、光合成の阻害や果実等の汚れが生じる(写真1、2)。

ア タバココナジラミ

オンシツコナジラミとは異なり、果実の着色異常を引き起こす(写真3)。本種は、トマト黄化病(ToCV)やトマト黄化葉巻病(TYLCV)を媒介する(写真4、5)。

イ オンシツコナジラミ

本種はトマト黄化病(ToCV)を媒介する(写真4)。

(3) 防除対策

ア ほ場周囲雑草の除草をこまめに行い、ほ場への飛び込み侵入を防止する。

イ ほ場周辺の野良生えトマトを除去する。

ウ 雨よけ栽培等では、UVカットフィルムの使用や施設開口部へ0.4mm目合い以下の防虫ネットを展張し、施設内への侵入を防止する。

エ 栽培ハウス内には、黄色粘着板・黄色粘着テープを設置し捕殺するとともに、発生初期に薬剤防除を行う。

- オ 薬剤の選定にあたり、薬剤抵抗性発達を防ぐため、IRAC コードが異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- カ 散布ムラがあると、防除効果が低くなるため、植物全体に薬剤がかかるように丁寧に散布する。
- キ 栽培終了後は、雑草も含めてハウス内のすべての植物を抜根し、植物体を完全に枯死したのち、秋期では5～6日程度、夏期は3～4日程度密閉して蒸し込み、コナジラミ類を死滅させる。蒸し込みの目安としては、40℃以上で1日7時間確保する。



写真1 排泄物によるすす病（果実）



写真2 排泄物によるすす病（葉）



写真3 タバココナジラミによる着色異常果



写真4 トマト黄化病 (ToCV)
葉に生じたえそ斑



写真5 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)
生長点付近の縮葉

2 アザミウマ類

(1) 福島県での発生状況

本県でのトマト及びミニトマトでは、主にミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマによる果実への被害が確認されている（写真6、7）。

本県の夏秋雨よけ栽培では、6月頃からアザミウマ類による果実被害が生じる（図2）。

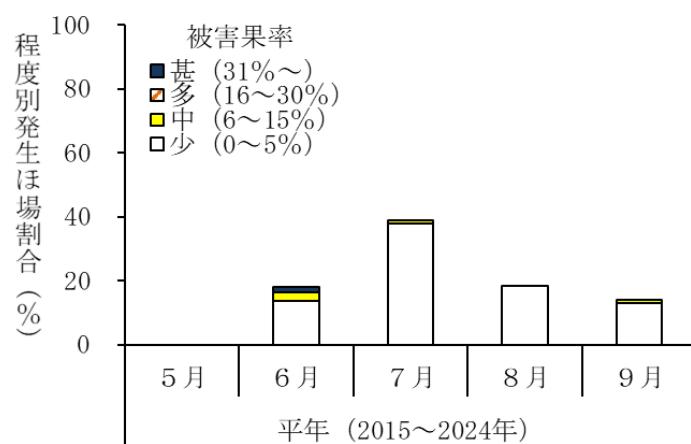


図2 アザミウマ類の発生状況
(夏秋トマト県内 11 ほ場: 県中 2、県南 4、会津 5)

(2) 形態及び生態、被害の様子

形態及び生態については、病害虫ライブラリー-野菜花き類の害虫（アザミウマ類
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/209614.pdf>）をご参考ください。

トマトにおいては、子房や幼果への産卵痕が白ぶくれとなり、着色しない（写真8）。ミニトマトにおいては、幼果を吸汁し、金粉症状が生じる（写真9）。アザミウマ類は、トマト黄化えそ病（TSWV）を媒介する（写真10）。特に、ミカンキイロアザミウマは媒介能力が高い。

(3) 防除対策

- ア ほ場周辺雑草の除草を徹底し、ほ場内への侵入を防ぐ。
- イ 施設周辺にシルバーマルチ、反射シートを設置し、施設内への侵入を抑制する。
- ウ 施設栽培では、UVカットフィルムの使用や開口部に防虫ネット（1mm目合以下）を設置し、施設内への侵入を防止する。赤色ネットを設置することで侵入抑制効果は高くなる。
- エ 多発すると防除効果が劣るため、ほ場をよく観察し、発生初期から薬剤防除に努める。



写真6 ミカンキイロアザミウマ（頭部）



写真7 ヒラズハナアザミウマ（頭部）



写真8 アザミウマ類による白ぶくれ果
(トマト)



写真9 アザミウマ類による金粉症状
(ミニトマト)



写真 10 トマト黄化えそ病 (TSWV)
葉のえそ症状

3 ハモグリバエ類

(1) 福島県での発生状況

本県のトマト、ミニトマトでは、主にトマトハモグリバエやナスハモグリバエの寄生が確認されている。

本県の夏秋雨よけ栽培では、定植後の5月頃から発生が確認され、栽培期間を通して発生する（図3）。

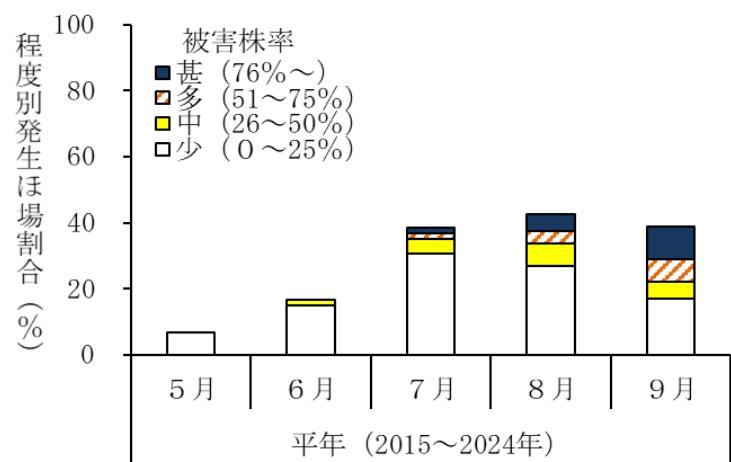


図3 ハモグリバエ類の発生状況
(夏秋トマト県内 11 ほ場:県中 2、県南 4、会津 5)

（2）形態及び生態、被害の様子

形態及び生態については、病害虫ライブラリー-野菜花き類の病害虫（ハモグリバエ類
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/319039.pdf>）をご参考ください。

トマト及びミニトマトでは、雌成虫が産卵管を葉に刺し、白い斑点が生じる（写真 11）。
ふ化した幼虫は、葉の内部を食害し、白い線状の食害痕が生じる（写真 12）。

（3）防除対策

- ア ほ場周辺の雑草防除をこまめに行い、ほ場への飛び込み侵入を防止する。
- イ 雨よけ栽培等では施設開口部への防虫ネット（1mm 目合い以下）を展張する。栽培ハウス内には、黄色粘着板・黄色粘着シートを設置する。
- ウ トマトハモグリバエは薬剤感受性が低く、効果の高い剤が少ないため、発生初期から寄生種を同定し、発生密度の低いうちから防除する。種の見分け方については、野菜・花きの害虫（ハモグリバエ類）を参考にして下さい。



写真 11 ハモグリバエ類雌成虫の産卵痕



写真 12 ハモグリバエ類幼虫による被害葉

4 オオタバコガ

（1）福島県での発生状況

本県のトマト及びミニトマトでは、夏～秋にかけて発生し、高温乾燥条件で発生が多くなりやすい。

夏秋雨よけ栽培では、7月以降に被害が増え始める（図4）。2024年の多発年には、6月に被害が確認された。2025年には、6月上旬に南会津町で寄生及び被害が確認され、近年、発生時期の早期化が懸念されている。また、フェロモントラップ調査では、5月下旬から誘殺が確認され、誘殺数のピークは9月上旬頃に見られる（図5）。

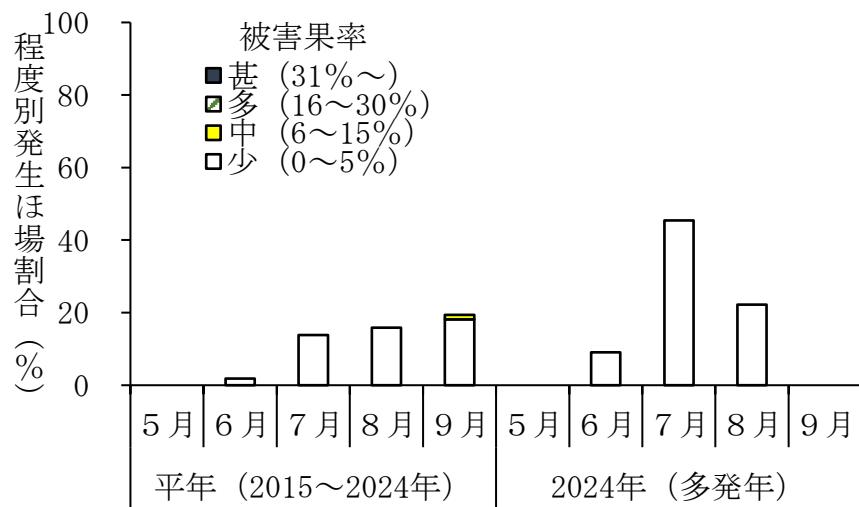


図4 オオタバコガの発生状況
(夏秋トマト県内 11 ほ場: 県中2、県南4、会津5)
※多発年とは注意報を発表した年

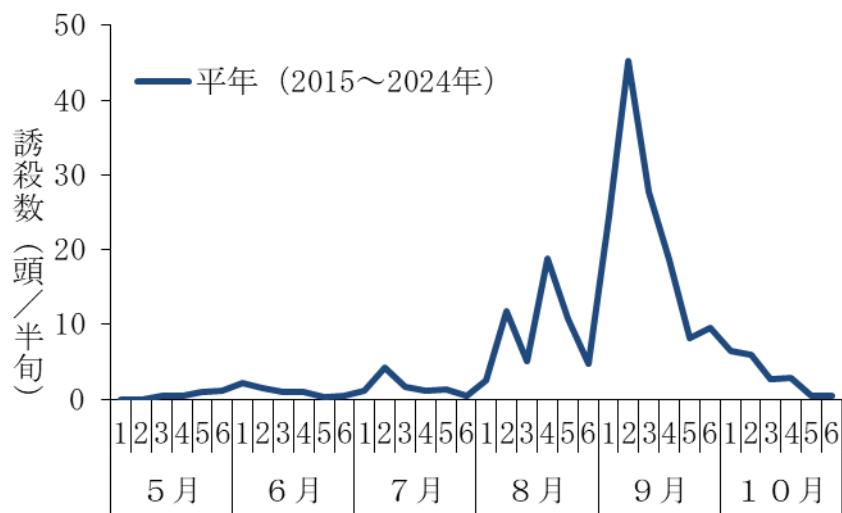


図5 フェロモントラップによるオオタバコガ誘殺状況
(猪苗代町: トマト)

(2) 形態及び生態、被害の様子

形態及び生態については、病害虫ライブラリー—野菜花き類の病害虫（チョウ目害虫 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/604859.pdf>）をご参考ください。

トマト及びミニトマトでは、若齢幼虫は花や新芽を食害するが、作物内に潜り込む性質が強く、すぐに茎や果実内に侵入し加害する（写真13）。

(3) 防除対策

- ア 雨よけ栽培等では、施設開口部に4mm 目合い以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- イ 幼虫は見つけ次第捕殺する。
- ウ 幼虫の齢期が進むと、茎や果実の内部に潜り薬剤がかかりにくくなるため、若齢期の防除を心がける。



写真 13 果実を食害するオオタバコガ幼虫

5 トマトキバガ

(1) 福島県での発生状況

トマトキバガは、本県では、2023年8月に初発生が確認された南米原産の害虫である。2025年12月現在では、県内全域での発生が見られており、長期どり冬春トマトでは、3月下旬頃から、夏秋トマトでは、定植直後の5月から被害が確認されている。

2025年のフェロモントラップ調査では、南会津町で5月6半旬、猪苗代町で6月2半旬から誘殺が確認され、誘殺数のピークは9月から10月にかけて見られた（図6、7）。2025年の調査では、過去2か年と比較し、誘殺数が大幅に増加した。

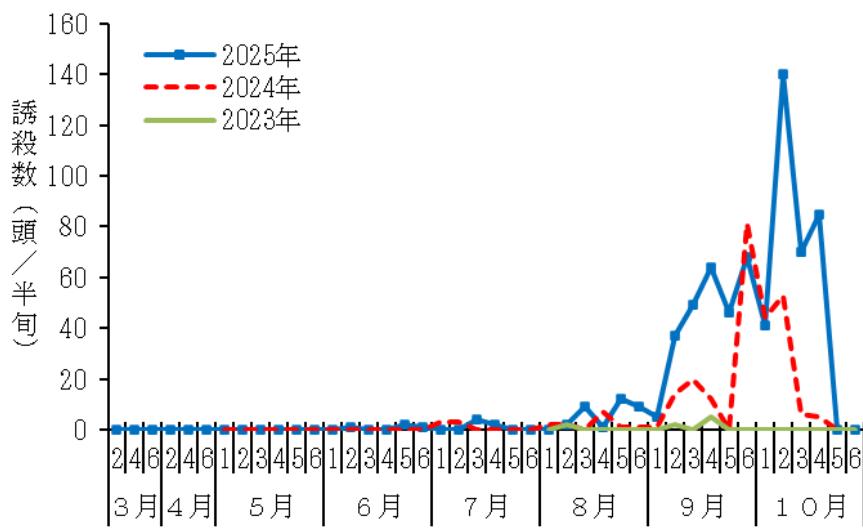


図6 フェロモントラップによるトマトキバガ誘殺状況
(猪苗代町: トマト)

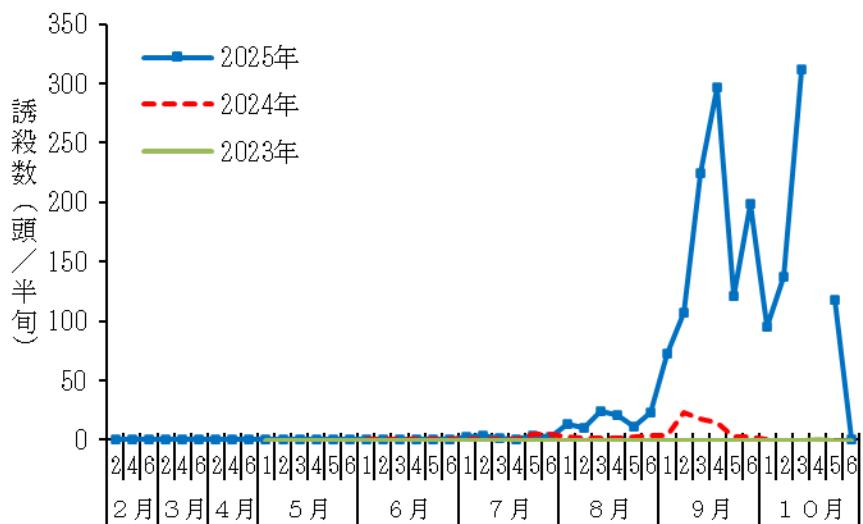


図7 フェロモントラップによるトマトキバガ誘殺状況
(南会津町: トマト)
※2025年10月4半旬のデータは欠測

(2) 形態及び生態、被害の様子

卵は円筒形で長さ 0.36mm、幅 0.22mm 程度、トマトでは葉や茎の下面に産み付けられることが多い。老齢幼虫の体長は 8mm 程度で、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色をしている。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（写真 14）。成虫の体長は 5～7mm で、前翅は灰褐色の地色に黒褐色が散在し、後翅は一様に淡黒褐色である（写真 16、18）。若齢幼虫は、新芽や茎、葉の内部を食害し、老齢幼虫は果実も食害する（写真 15、

17、19)。発生世代は環境条件によって異なるが、卵～成虫になるまでに期間は、24～38日程度で、年に10～12世代発生する地域がある。

(3) 防除対策

- ア 雨よけ栽培等では、施設開口部に0.8mm目合い以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- イ ほ場をよく観察し、被害葉や被害果の早期発見に努め、発生が見られる場合は速やかに捕殺する。
- ウ 摘葉後の残さは、幼虫が寄生している可能性があるため、ビニール袋等に入れ、一定期間密閉（蒸し込み）し、寄生した成幼虫を完全に死滅させるか、土中に深く埋没する等の方法で適切に処分する。
- エ 寄生及び被害が確認されたら、薬剤防除を実施する。
- オ 栽培終了後の植物体は本種の発生源となるため、速やかに枯死させ、適切に処分する。
- カ 冬期間はハウスの被覆を剥がし、喚起にさらし、ハウス内での越冬を防ぐ。ハウスの被覆を剥がすことが難しい場合には、できるだけ開口部を開け、路地条件に近づける。
- キ 冬期間に他品目を作付けする場合には、ハウス内の雑草防除に努める。ナス科雑草や野良生えトマトは、本種の増殖源になり得るため、見つけ次第抜き取り処分する。



写真14 トマトキバガ幼虫（体長8mm）



写真15 葉に寄生するトマトキバガ幼虫



写真 16 フェロモントラップに誘殺された
トマトキバガ雄成虫
(体長 5 ~ 7 mm)



写真 17 トマトキバガ幼虫による被害葉



写真 18 トマトキバガ成虫



写真 19 トマトキバガ幼虫による被害果実

【出典・参考資料】

- (1) 令和 5 年度病害虫発生予察注意報第 2 号 (千葉県農林総合研究センター)
<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/documents/20231220tyuihou02.pdf>
- (2) 植物防疫所害虫情報第 138 号 (2025 年 6 月 16 日) (植物防疫所)
<https://www.maff.go.jp/pps/j/guidance/pestinfo/attach/attach/138/attach/pdf/138-tomatokiba.pdf>